（別紙1）

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業　教育・研究活動事業実績報告書

<table>
<tr><td>教育･研究活動名</td><td colspan="5">安心して暮らせる環境づくり
（1）難民支援活動及び啓発
（2）尼崎市在住の外国人支援および交流
（3）災害時の多言語対応（非常時における社会的弱者への支援）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">申請大学･高校等名</td><td>大学及び
高校等名</td><td colspan="4">兵庫県立尼崎小田高等学校</td></tr>
<tr><td>活動
グループ名</td><td colspan="2">国際探求「members of a society」</td><td>参加学生
等人数</td><td>22　人</td></tr>
<tr><td rowspan="3">指導責任者名
及び連絡先</td><td>学部･学科等
名称</td><td colspan="4">国際探求学科</td></tr>
<tr><td>責任者氏名</td><td>下田　貴子</td><td>連絡先
電話番号</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>E-mail</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">協働する市民活動団
体及び代表者名</td><td>団体名</td><td colspan="4">尼崎市国際交流協会</td></tr>
<tr><td>代表者氏名</td><td>理事　古川剛</td><td>連絡先
電話番号</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>E-mail</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td>教育･研究活動
目標</td><td colspan="5">地域住民が安心して暮らせるまちづくりを目標に、社会的弱者である外国人への支援が行き届くように、啓発及び交流を行っていく。また、日常においても、困った時に頼ることができる人が少ない外国人を支援、及び交流する会を企画し、安心して暮らすことができる環境づくりに貢献する。
（1）難民が生み出される原因を解消、また難民を積極的に受け入れることを最終目標にする。実際に難民の方と交流し、高校生としてできることを考えることと、難民問題を広く知ってもらうために、イベントを開催して啓発･および人を繋ぐことを今年度の目標とする。
（2）尼崎市在住の外国人と一緒に日本食をつくり食べることで、楽しく交流する。また、外国人の方に日本食がいかに栄養バランスが整った食事なのかを知ってもらい、今後の生活に生かしてもらう。
（3）自然災害時に、外国人居住者（大人も子どもも）に適切な情報および支援が届くよう、多言語対応の促進に取り組む。</td></tr>
<tr><td>活動内容及び
実績、評価</td><td colspan="5">（活動内容･発表会）

活動内容：　別紙報告
発表会：令和 7 年2月 1 日（本校で実施）

（評価）
①　学生
･イベントに思ったより外国人の参加者を集めることができなかった。
･難民の人は苦しい気持ちの中生活をしていると思っていたけど、実際に会うととても明るく強く生きていて、逆に勇気をもらえた。
･外国人の方が日本食の栄養バランスについて知ってる割合は低く、コンビニのごはんで済ましている方が多いことが分かった。
･在日外国人は、英語を母語としない人もいる。そのため、簡単な日本語を使ってコミュニケーションをすることは最も良い手段であると言える。
･一緒に調理をして一緒に食べて、外国人の方との仲が深まった。
･実際にウクライナからの避難民の方の声を聴くことで、本やインターネットで調べるよりも深く学べることができた。
･講演会やイベント行事に参加して学んだ情報を、様々な人に共有できる能力がついた。
･コミュニケーション能力がついた。</td></tr>
</table>

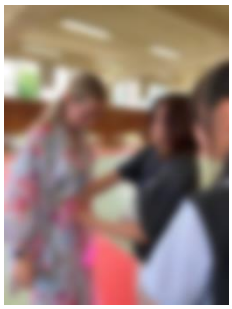
	②市民活動団体の活動者 難民班 学生さん達がウクライナの難民の方々に実際に会い、交流したことが最大の達成である。関西ウクライナ友好協会、尼崎市国際交流協会、共に今回の高校生の参画が今後のイベント企画において10代、20代といった若い人達が主体となるものを取り込むきっかけとなった。実際にウクライナの難民の方々と交流したことで、「今迄以上に支援の意識が高まった、ウクライナだけでなく他国の方々への支援も同等と考える。」とウクライナ友好協会の方も感じていたようだ。 災害班 外国人参加者の数が少ないといった不利な状況において、その中での目標に向けた取り組み自体が成果達成である。尼崎市国際交流協会も外国人を集めることに苦労しており、今後は外国人が普段たくさん居る場所を訪問する等して着実な多数の外国人参加を計画する。地域の日本語教室に通う外国人へのアンケートを通じ、直接会わずとも地域の外国人への防災への意識・関心を少しでも高めた。アンケートには、やさしい日本語で「自身の揺れが収まった後の行動」「大雨時にはくべき靴」「エレベーターで揺れを感じたらどうするか」「災害時の荷物」などに関する2択のクイズを出し、正答を発表した。防災のためには準備や予備知識が必要だと感じたのとの声を聞いた。 外国人支援班 災害班と同様外国人参加者の数が少ないといった不利な状況において、取り組みの創意工夫が目標達成の意識を高めた。協力された尼崎市役所小田地域課が今後も探究活動において継続的な支援をしていただける。外国人への支援が探究活動以外にも、住み良いまちづくりに大いに活かされる、といった気付きに結び付いた。また、「日本食を一緒につくり食べる」という活動は、ただ説明するだけのワークショップなどとは違い、とても楽しく行うことができ、参加者の満足度も高いと感じた。参加者が「日本食はバランスが整っている」ということを身をもって知るいい機会となり、参加者活動型のアクティビティの持つ力の大きさを改めて知ることになった。 ②　指導教員 　この1年間の活動を通して、生徒は本当に様々な地域の方々と関わることができた。その成果として、たくさんの生徒が「コミュニケーション能力がついた」と感じているのではないかと思う。様々な立場や年齢層の方と話をする中で、「相手を尊重して相手の立場になって考える」という力がついたと感じる。また、生徒は他のメンバーとの協調や準備計画の大切さを身をもって感じたようである。このように、地域に住んでいる外国人の方と身近に関われる機会は、国際探求学科独自のものであり、生徒も得難い体験をすることができたのではないかと思う。 　個々の活動をみていくと、目標の（1）難民の方と交流し、高校生としてできることを考える、難民問題を広く知ってもらう、という目標は十分に達成できたものと考える。関西ウクライナ友好協会の方にワークショップを行っていただき、実際にウクライナからの避難民の方の想いを直接聞くことができた。また、その際、避難民の方が「日本で生活していく中での最低限のルールが知りたい」と話していたことから、高校生が「日本生活ガイドブック」を作成し、次回の交流時にガイドブックをお渡しすることができた。避難民の方は、高校生がガイドブックを作成したり、ワークショップを開いたことについて涙ぐんで喜ばれていた。また、市民まつりでは、ウクライナ避難民の方との交流から学んだことを基に、難民問題に関するクイズを作成し、様々な年代のたくさんの方にクイズに参加していただき、啓蒙活動を行うことができた。 　（2）尼崎市在住の外国人と一緒に日本食をつくり食べることで、楽しく交流し、日本食がいかに栄養バランスが整った食事なのかを知ってもらう目標に関しても、達成したと考える。参加者へのアンケートに、「日本食がバランスが整った食事だということがわかり、実際に家庭で同じメニューを再現してつくってみた」という意見もあった。 　（3）自然災害時に、外国人居住者に適切な情報および支援が届くよう、多言語対応の促進に進むに関しては、イベントに外国人の方が参加できず、十分に達成したとは言い難い面もある。しかし、高校生は自分たちで英語の字幕つきの災害時の対応ビデオを作成し上映したり、実際に突然地震がおこったという設定で避難訓練を行ったり、避難食の実食をしたりした。これらは、全て近隣に在住の外国人の方にとって非常に有益な知識・情報であったのではないかと考える。

※　報告書の内容及び掲載写真は、市報、HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします。

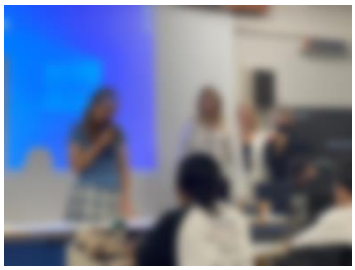
国際探求「members of a society」の活動報告書

① おむかいさんぷろじぇくと主催尼崎ウォーク・スタンプラリー （参加：難民支援班・災害時の多言語対応班）
5 月 26 日におむかいさんぷろじぇくと主催の尼崎ウォーク・スタンプラリーに参加した。グループに分かれ、尼崎近郊在住の外国人とともに尼崎の街を巡りながら、お互いの紹介や文化についてなど語り合った。一緒に巡ることで、これまで知らなかった尼崎の良さに気づき伝えることができた。

② 小田高文化祭 （参加：尼崎市在住の外国人支援班・災害時の多言語対応班・難民支援班）
6 月 14 日に小田地域課、尼崎市国際交流課やおむかいさんぷろじぇくとの協力を得て、剣道場を使用して、外国人の方に日本文化の紹介・体験してもらう活動を行った。会場では、茶道、柔道着を着用しての技の紹介、浴衣の着付け体験を行った。文化祭に訪れた外国人（中国・オーストラリア・フランス・アメリカなど）に日本文化を伝えるには、まずは自らが自国の文化を体現することが大切だということに気づいた。

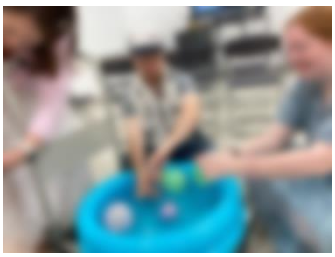


③ ウクライナ難民の方のワークショップ （参加：難民支援班）
8 月 7 日に尼崎小田高校にて、関西ウクライナ友好協会の方にワークショップをしていただいた。協会の職員の方にウクライナ現地の様子を教えていただいたり、避難民の中学生の女の子にスピーチをしていただいた。同協会が作成されたウクライナの戦火の状況を伝えるビデオにはショッキングな映像もあり、生徒の琴線にふれたようであった。そこでの交流で、日本に避難している難民の方は、日本での生活するうえでの最低限のルールを知りたいと思っていることがわかり、その後の日本生活ガイドブックを作製するヒントとなった。



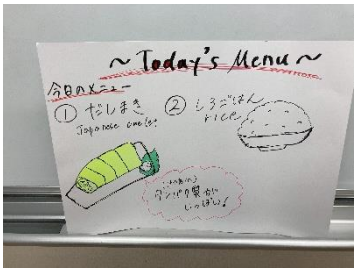
④　夏まつり（参加：災害時の多言語対応班）

８ 月 ８ 日に小田南生涯学習プラザにて夏まつりを開催した。ヨーヨー釣りやお面作りを参加者に楽しんでもらい、最後に生徒作成の防災ビデオを見てもらい、クイズに答えてもらった。夏休み中ということもあり、親子や子供たちが多く訪れたが、尼崎在住の外国人に参加してもらうのは難しい状況だった。だが参加してくださった方々の多くからは、防災について楽しく学べたという意見を聞くことができた。



⑤　尼崎在住外国人と一緒に和食を作るワークショップ （参加：外国人支援班）

８ 月 ９ 日に小田北生涯学習プラザにて、在日外国人に和食の良さを知ってもらうワークショップを行った。参加者のアメリカ人と香港出身の方に、和食は栄養バランスが取りやすいことを伝え、実際にだし巻き卵を一緒に調理した。一般的なだし巻き卵や、外国人にも受け入れやすそうなチーズ入り、ソーセージ入りの卵焼きを作り、調理したものを一緒に食べながら、それぞれの国の食事についての話をした。



⑥　青フェス （参加：尼崎市在住の外国人支援班）

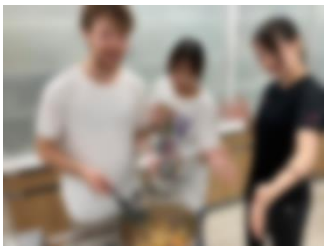
８月２４日に尼崎市立小田北生涯学習プラザで行われた青フェスにおいて、外国人支援班が日本食ワークショップを行った。参加者のアメリカ人とベトナム人の方と一緒に具沢山味噌汁ときゅうりの浅漬けをつくった。味噌汁の具材に、園北ファームで採取した無農薬ものをつかった。

⑦　難民の方へのワークショップ（参加：難民支援班）

９月１５日に尼崎市立小田南生涯学習プラザで、関西ウクライナ友好協会の協力のもと、ウクライナ難民の方々をお招きした。先月ウクライナ難民の方々からお聞きしたことをまとめ、その内容や感想を生徒たちが英語で発表を行った。発表の際、聞きながら涙を浮かべる難民の方もいて、確実に生徒たちの思いが伝わっていることを感じ取れた。そのあとは生徒たち発案の日本で生活するうえでのルールブックを、おひとりずつにお渡しし、生徒たちが手作りした日本語カルタをして、交流を深めた。

⑧　尼崎在住外国人と一緒に和食を作るワークショップ（参加：外国人支援班）

９月22日に尼崎市立小田南生涯学習プラザにて、外国人支援班が日本食ワークショップ第3弾を行った。アメリカ人の参加者を対象に、肉じゃがとほうれん草のおひたしをつくった。回を重ねるごとに手のこんだ料理に挑戦することとなった。参加者にアンケートも行い、このワークショップがどんな風に参加者の意識を変化させたを調査した。アンケートによると、このワークショップの後に、実際に自宅で同じ料理に挑戦した参加者がいたこともわかった。

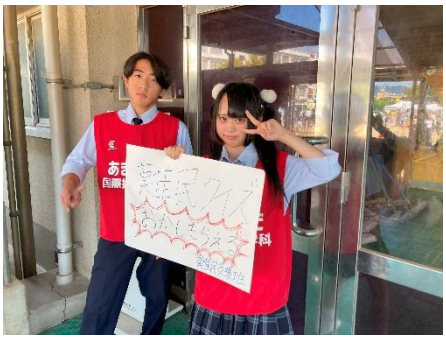


⑨　外国人の方との避難訓練　（参加：災害時の多言語対応班）

９月28日に尼崎小田高校にて、外国人に向けた避難訓練を行った。外国人の参加者は本校の ALT1名であったが、アイスブレイクの交流活動を行ったり、防災の啓蒙ビデオを見たり、実際に避難訓練を行ったり、避難食を実際に食べたりした。

⑩　尼崎市民まつり（参加：災害時の多言語対応班・難民支援班）

10月6日に尼崎市立中央中学校での尼崎市民まつりに、災害時の多言語対応班と難民支援班が参加した。災害時の多言語対応班は災害に関する啓蒙ビデオを流したり、避難食の実食をした。難民支援班は、難民に関するクイズを参加者に行った。



⑪ SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会（参加：難民支援班・災害時の多言語対応班・外国人支援班）
2月1日に尼崎小田高校にて、SSH 小田高リサーチ生徒研究発表会に難民支援班、災害時の多言語対応班、外国人支援班の3班が参加した。難民支援班は体育館ステージ上で1年間の探究活動をパワーポイントを使用し発表した。参加者に生活ガイドブックを配ったり、難民クイズを出したり、興味を持ってもらえるよう工夫をこらしたプレゼンテーションを行った。参加者からはたくさん質問をしてもらえた。災害時の多言語対応班と外国人支援班は、ポスター発表を行った。大学の教員から、探究活動に対するコメント、アドバイスを多数もらえた。